

答法」を行い、後半は「嘘をついてはいけないのか」という問いについて全体で話し合った。このような話し合いを行う上ではやはり様々な人の考えが出てきた方が、話し合い自体に面白みが出てくるだろう。その点では、やはり本が好きな人もそこまで本を読まない人も、図書館という場所が様々な人が集まれるような空間になればそれは実現するのだと考えられる。

そのためには、多くの人に哲学カフェというものの存在を知ってもらうこととそれを実際に図書館で体験してもらう機会がもっと増えると良いと考える。

本に囲まれながら哲学する

—いわき哲学カフェの報告—

西山 溪（立教大学文学研究科教育学専攻博士前期課程1年）

2012年12月22日、冷たい風の吹く日の午後、福島県いわき市の総合図書館は多くの人を訪れていた。勉強をする学生や、新聞を読む近所の人、絵本を読む子どもなど様々だった。そのような中、図書館の一角の小部屋には次々と人が集まっていた。部屋の入り口には次のように書かれていた。—いわき哲学カフェを行います—

哲学カフェとは何だろうか。哲学という名前を聞くと、それだけで身構えてしまう人もいるかもしれない。哲学という名前に付きまとうイメージは、「偉い人が難しいことについて考える」とか「よくわからない」というものだろう。だが、哲学カフェはそうではない。哲学カフェでは参加者に哲学の専門用語や、特別な知識は要求されない。参加者がすることは、コーヒーを持ち、話すテーマを決め、テーマに対して自分の考えを—自分自身の言葉で—述べ、他者の話を聞く、ただそれだけである。ここではどのような意見でも述べることができ、また受け入れられる。「コーヒー一杯の前の平等」が約束された空間とも言えようか。

哲学カフェの歴史はそれほど昔ではない。1992年パリのバスティーユ広場の一角のカフェで哲学対話を始めたマルク・ソーテがその創始者とされている。ソーテは言う。「哲学する」とは、すでに答えは与えられているが実際にはうまくいっていない問題を、文字通り「再検討の対象とする」ことなのだ¹⁾と。哲学カフェの目的はまさにこの、普段何気なく見ている現実にある様々な問題を再検討していくことにある。

この日「再検討の対象」とされたのは、「震災後の私たちの生活」だった。訪れた約15名のいわき市在住者や出身者、いわき市で仕事をされている方々は、部屋の中で円を作り、さっそく対話を始めた。

みなさんの生活について、ここで一緒に考えていきたいことはありますか？—ファシリテーターがこう問いかけると、様々な問いが参加者の中から出てきた。「震災後変えたこと変わったこと」、「今の生活で変えたいと思うこと」、「震災によって失ったものと得たもの」、「震災病になったか」という変化を問うものから、「当事者と傍観者の温度差」といった当事者との意識のずれを話し合いたいという人もいた。

テーマを決めたのち、私たちは「変化」、特に「何が変わったか」についてまず話し合った。資源が有限であることに気づいたという人もいれば、明日がやってくるかもわからないという日常に対する不安を語る人、生まれ育った地の変化から自分のアイデンティティが損なわ

れたように思う人、「被災者」とひとくくりにされることへの不満を語る人など様々な意見が飛び交った。

あっという間に1時間が終わり、休憩に入った。初めは緊張していた参加者の表情はゆるやかになり、会場の雰囲気はとてもしっとりしたものになっていた。休憩時間になっても参加者の多くは近くの人と話を続けていた。まるでこれまでそのような話を他人としたことがないというかのように、彼らはコーヒーを片手に熱心に話し合いを続けていた。

前半の話を引き継ぎつつ、後半は「今の生活で変えたいこと」について話し合いを行った。日々の生活に追われ、忘れてしまっていたことに気づかされたと言って、多くの人が、ここで自身の体験を語りはじめた。ガソリンを毎日入れないと不安になるということ、自分の息子や孫にはもうこの土地に戻ってきてほしくないと思っているということ、いまだにプレハブの学校や仮設住宅があることなどを、彼らはゆっくりと語り始めた。中には自身の父と話し合い、どうせ原発はもうだめだから私たちは「名もなき実験体」になって歴史に名を刻もうと覚悟を決めた人もいた。

話し合いをしているうちに、これらの議論にはすべて「私たちの誰しものが何かをしたいがどうしていいかわからない」という共通の土台があることが分かってきた。原発も、仮設住宅も、荒れた土地も、誰しものが何かしたいのにどうしたらよいかかわからない、彼らは悩んだ。ここで「今の生活を変えるのは市民か行政か」と問いが変化し、話し合いは続行した。

2時間は瞬く間に過ぎていった。多くの参加者が「もう終わり？」という顔をしていたのを私は覚えている。何か答えを出したわけでもなく、何か具体的な案が出たわけでもなく、何か問題が解決したわけでもない。参加者の人々は、自分がこれまで抱えてきた不安、悲しみ、怒りをありのままに2時間話ただけである。それでも彼らは2時間が過ぎても、哲学カフェが終わっても、その場にとどまり話を続けていた。彼らはまだ話したいことがたくさんあった。彼らのこの姿勢や表情は、本日の哲学カフェの成功を物語っていた。

彼らにとって「私」の抱える不安や問題を「みんな」の前で話す機会はそう多くはないのではないだろうか。わたしにとって衝撃だったのはある参加者が「いわきはまだ他の被災地と比べてましな方だから」という趣旨の発言したときだ。彼ら1人1人の抱える問題は、私が想像していた以上に深刻なものだった。にもかかわらず彼は他の被災地の方が深刻であるがゆえに自分たちの抱える問題は「まだまし」だと思い、これまで言い出せずにいたのではないだろうか。

いわき哲学カフェが私たちに語りかけたのは、彼らは自身の話を語る場を求めているということであった。何か解決するわけでもなく、何か達成されるわけでもないかもしれない。それでも彼らは語る場を求めている。私はそう感じた。自分と同じ悩みを抱える仲間を見つけ、その人たちと自分のことについて語り合う、そのような場が今必要とされているに違いない。

そのため、図書館で哲学カフェを開くことは大きな意義がある。図書館は本を貸出したり、資料を展示したりするだけではない。社会教育の場としての図書館は、彼らに語る場を提供することで、人々が今ある問題を「再検討」する機会を与えることに貢献するだろう。たとえどんなに小さくても、このような草の根の民主主義の活動の場を提供することは、震災を経験した日本の図書館にこそ、これからよりいっそう求められることとなるのではないだろうか。

¹⁾ マルク・ソーテ著、堀内ゆかり訳『ソクラテスのカフェ』紀伊國屋書店、1996、p. 47.